とうかい

2022 年 6 月 9 日　NO.627

「御同朋の社会をめざす運動」東海教区委員会　広報部
〒460-0018　名古屋市中区門前町1番23号
東海教区教務所内
TEL 052-321-0028　FAX 052-332-4097
e-mail　info@tokai-hongwanji.net

# 東海教区　広報部新体制の挨拶

広報部が新体制となりました。写真の部員５名と事務局１名、計６名で進めてまいります。月１回発行の教区報では教区や宗派からのお知らせや教区行事などの案内を皆さまに分かりやすくお伝えしてまいります。

また、年４回発行の教区報「とうかい」は、法話やエッセー・書評に加え各号独自の企画ページを設けております。読み物としての楽しさを目指しつつ、教化活動への意欲の向上や研鑽、情報共有に少しでも資することができるよう充実した紙面作成を目指してまいります。改めてよろしくお願いいたします。

また、「とうかい」では教区の皆さまにも法話やエッセー、書評のページをご執筆いただいております。執筆を希望される方や、こんな企画の記事を読んでみたい等のご要望などがありましたら担当池村まで是非ご連絡ください。

**名前（組名・寺号）**
**最近の関心事**

**池村祐樹（東海教区教務所）**
**大谷翔平の2年連続 MVP**

**日野道応（桑名組最勝寺）**
**若者のテレビ離れ**

**松野尾浩慈（額田組明願寺）**
**息子の中間試験結果**

**三宅千空（名古屋組教西寺）**
**夏休みの寺子屋何日やるか**

**加藤学（桑名組善徳寺）**
**手入れできていない竹藪**

**芝田朋之（三重組西光寺）**
**お寺に子どもが集まるｲﾍﾞﾝﾄ**

Contents

| | |
|---|---|
| 広報部挨拶 | P1 |
| こころばなし | P2 |
| 宗会報告 | P3 |
| 特集 | P4～6 |
| 寺青 40 周年 | P7 |
| 声 | P8 |

# 『底知れないあたたかさ』

服部 康信（鈴鹿組光明寺）

つい最近にお聞かせ頂いたお話なのです。とある街にＡ子さんという方とそのお母さんがいらっしゃいました。お母さんはもうすぐ９０才、Ａ子さんは６０才だったそうです。そのお母さんは認知症を患っていらっしゃったので、Ａ子さんが自宅で介護をされていました。ある日、お母さんが窓をじっと見て、「あれは何？」ときいてきたので、Ａ子さんも窓を見ると、電線に鳩がずらっととまっていたそうです。Ａ子さんが「お母さん、あれは鳩よ。」と返事をしました。するとまたしばらくして、お母さんが同じ質問をしました。Ａ子さんはやれやれと思いながら「また同じことを言うのね、あれは鳩よ。」と素っ気なく答えました。またしばらくしてお母さんが同じ質問をしようとしたので、Ａ子さんはお母さんの言葉をふさぐように「あれは鳩よ。何度同じことをきくの！」と語気を強めてしまったのです。お母さんはしょんぼりとしてもう言葉も出なくなったのでした。そして、その日から１週間後にお母さんはお亡くなりになったのでした。

満中陰の法要をお勤めになったのちに、Ａ子さんはお母さんの遺品を整理しました。すると何冊もお母さんの日記帳が出てきました。１冊の日記帳をふと手に取って読んでみたら、Ａ子さんが２才になって初めてお母さんと近所の公園にいったことが綴られていました。２才のＡ子さんにしてみたら見るもの聞くもの初めてのものばかりで、とても興味深く楽しい事だったに違いありません。すると公園の樹木に鳩がたくさんとまっていたそうです。Ａ子さんは、さかんに鳩を指さして「あれなーに、あれなーに」と何度も何度もお母さんにたずねました。するとお母さんはあきることなく何度も何度も「あれは鳩という鳥さんだよ」と答えたそうです。何度も答えるうちにＡ子さんがとてもとても愛おしくなって、ぎゅっと抱きしめてしまったと日記帳にお母さんの想いがつづってありました。そして、「Ａ子ちゃん私のこどもとして生まれてきてくれて、本当にありがとう。」とその日の出来事をむすんであったのでした。Ａ子さんは涙がいくすじも流れてきて、とてもとても後悔されたそうです。なんであの日お母さんにもっと優しく言葉をかけることができなかったのだろうかと。

仏さまのお慈悲に通じたお話だと、聞いていて胸が熱くなりました。よく仏さまのお慈悲は一方通行だといわれます。私が仏さまに背を向けていても、仏さまはあきらめずにこの私を照らし、育んでくださいます。そして、このＡ子さんのように親（仏さま）のお慈悲を受けとったならば、「ごめんなさいと素直にいえるような人と成る」と２０年ほど昔、先生から教えていただいたことを思い出しました。仏さまはこのようにいろいろと手をつくして何度も私に教えてくださいます。そのたびに私自身はなんともお恥ずかしいばかりです。

仏さまの智慧（かしこさ）と慈悲（あたたかさ）は底知れないおはたらきであるといわれています。この私こそを照らす智慧と慈悲であると同時にいのちあるものすべてをつつみこんでいてくださるのです。

称　名

# 宗会報告　額田組明願寺住職　松野尾慈音

２月に開会した定期宗会はコロナ禍の中、大半の議員が本山に参集し、会議場と控え室傍聴とに二分割した形で開催されました。この報告では宗会で取り上げられた多くの問題の中で一般寺院や僧侶、門信徒に直接関わりのある、二つの課題に絞ってお伝えします。

まず一つめは、領解文の現代化です。領解文は浄土真宗の信心の要を蓮如上人がお示し下さったものであり、様々な場面で僧俗共々に「領解出言…」と唱和されて来ました。しかし今日「伝わる伝道」の観点より、宗門総合振興計画の一環として現代化が進められてきたものです。そして今般、昨年の春の法要の御親教にお示し下さった「浄土真宗のみ教え」を以て領解文を現代化したものと総局が位置づけたものです。

これに対して宗会では通告質問やその他の質疑で、教団として唱和することを決めた手続きが曖昧であり、又「『浄土真宗のみ教え』について勧学寮の検討を経るべき」等の意見が出されました。今後は検討委員会を設けて、さらに調整を重ねることになりました。

次に大きな関心が寄せられたのは、宗報の本年２月号に掲載された、「賦課基準の見直しについて（第二次答申）」です。これは全ての一般寺院が基本として納めるべき賦課金の算定根拠を抜本的に見直す話ですから、特に東海教区では組によってはこの見直しによって増額する可能性が高いと思われますので、教区の皆様には注視していただきたいと思います。

まず見直しの概要についてですが、現状は各寺院の届出門徒戸数、乃至は護持口数に応じて賦課金額が決められていますが、見直し後は各寺院の総収入額によって決まるようになるのが、最大の変更点です。その背景として、昭和 26 年以来の届出門徒戸数は多くの寺院で今日まで変わっていませんが、この 70 年間で大都市圏への大規模な人口移動が起こり、その結果一般寺院の賦課金の負担額に不公平感が生じていることです。この答申の見直しのスケジュールによれば、来年度には各教区の教務所長に収入報告書を提出することになっており、新たな賦課制度の発足は令和６年度が見込まれています。

ここで大きな問題となるのは、新たな制度に切り変わった場合の各寺院の賦課金額の増減の予想が、全く見通せないことです。特に都市部の寺院では、概ね 70 年の間に収入が増加していると思いますが、収入報告書を提出することで賦課金がどの程度増加するのか見通しが立たないままでは、報告書の提出を躊躇する寺院があっても不思議ではありません。今後総局には、見直しに至った理由を丁寧に納得の得られるまで説明することが不可欠となります。説明が不十分なままで寺院収入の報告を急げば、一般寺院の不信と混乱を招きかねません。教区より選出された宗会議員としてこの点をしっかりと確認し、賦課制度の見直しに関わる教区寺院の意見を伝えてまいります。

# ～知ることで始める第一歩～

**2022 年 2 月 24 日、ロシア軍がウクライナへ武力侵攻しました。人命を軽んじ、人権を侵害し、平和を壊す武力侵攻は決して許されませんし、宗派を含め世界中のあらゆる個人、団体が抗議声明を発表しております。しかし、改めて考えると、私たちはウクライナやロシアの歴史や言語、文化や宗教をどれほど知っているのでしょうか。相互理解や思想・芸術の力は微力かもしれませんが、平和へと繋がる確かな一歩になります。そこで今号の特集では、ウクライナやロシアの様々な面を感じ、学ぶことのできる書籍や音楽を紹介いたします。**

## 『同志少女よ、敵を撃て』　著：逢坂冬馬　発行：早川書房

2022 年本屋大賞受賞作。1940 年代の独ソ戦における女性狙撃小隊の物語です。

本作はエンターテインメント要素が多く、史実に基づかない部分も多いです。しかし著者が「もっとも参考になったのは、この小説の原点でもあるスヴェトラーナ・アレクシエーヴィチさんの『戦争は女の顔をしていない』です」と述べるように、歴史的背景を踏まえたうえで小説として描いています。

内容としてはソ連側から見た独ソ戦ではありますが、小隊の隊員としてウクライナのコサック出身であったり、カザフの猟師であったりという背景を持った少女たちが描かれ、彼の地における国家や民族が歩んできた道のりがあることがうかがわれます。

スピード感のある戦闘描写など、ベースは戦争アクション小説ですが、戦争賛美ではなく、その悲惨さと理不尽さを描いたものとなっています。

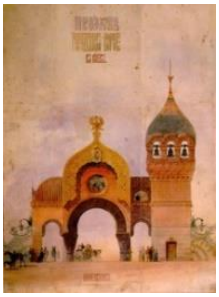
史実や時代考証としてどうかということより、まずは読む楽しみから入る中で、歴史的背景にも興味をもてるという意味で、様々な方に読みやすい作品といえるでしょう。

## 組曲「展覧会の絵」より『キエフの大門』　作曲：ﾓﾃﾞｽﾄ･ﾑｿﾙｸﾞｽｷｰ　編曲：ﾓｰﾘｽ･ﾗﾌﾞｪﾙ

テレビ番組「ナニコレ珍百景」で使われている曲、と聞いたら、なんとなくわかる方も多いのではないでしょうか。「キエフの大門」とは、ウクライナの首都、キエフ（キーウ）の歴史的地区にある史跡で、キエフ大公国時代の中央門「黄金の門」だそうです。

「音楽に国境はない」とは、よく言われる言葉です。ムソルグスキーはロシアの作曲家ですが、友人の画家、ヴィクトル・ハルトマンが遺した 10 枚の絵（現在ロシアのエルミタージュ美術館蔵）から着想を得て絵画的組曲を世に送り出しました。フランスの作曲家ラヴェルがオーケストラ編成に編曲し、その音楽は大陸や海を渡り、日本でも多くの方に親しまれています。我が子がバイオリンとピアノの発表会で演奏したこともあり、思い入れのある曲です。

多くの国のロシアの音楽家が、演奏の機会を奪われている、と報道で知りました。言葉が伝わらなくても、その国の音楽は我々の心を癒し、鼓舞し、聴く人の心を一つにする力があります。誰もが気兼ねなくどんな音楽も演奏し聴くことができる世の中であってほしいと強く願います。



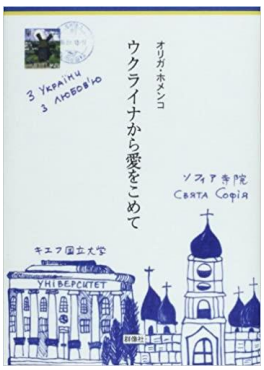
## 『ウクライナから愛をこめて』　著：オリガホメンコ　発行：群像社

本書はウクライナの首都キーウ生まれの女性、オリガ・ホメンコさんが故郷の魅力と思い出を日本語で書かれた本です。

著者がウクライナを訪れたことのない人にいつも紹介しているという散策路をとおして、1500 年以上の歴史ある首都キーウの街並みを知ることができます。街の外観だけでなく、「キーウを象徴する花を咲かせるマロニエの木はなぜ植えられたのか？」、「世界遺産のソフィア寺院はソ連時代の宗教弾圧をどうやって乗り越えることができたのか？」といった歴史的な内容も紹介されています。

著者が故郷の忘れられない人たちとして綴るのは、ロシア革命や世界大戦を背景とした家族、知人の思い出です。ロシア革命で農地を取り上げられた“ひいおじいさん” の話や、戦争によって婚約した男性との結婚が叶わなかった“マリーナおばさん”の話。どれも歴史の教科書から抜け落ちた、ウクライナという国で暮らした人たちの姿が書かれています。

自身の思い出として語られるのは、チェルノブイリ原発事故の記憶です。国の方針で子どもたちだけが避難することになり、しばらく両親と離ればなれになったのが悲しくて、今も思い出したくない事故だったといいます。最後には東北震災時の福島原発事故のことを誰よりも共感したというオリガさんから日本へのメッセージが綴られています。




## 『てぶくろ』　絵：ｴｳｹﾞﾆｰ･M･ﾗﾁｮﾌ　訳：内田 莉莎子　発行：福音館書店
## 『おおきなかぶ』　画：佐藤 忠良　訳：内田 莉莎子　発行：福音館書店

この絵本は２冊とも報道などで話題になっていたので、ご存じかもしれません。ウクライナとロシアの民話です。

『てぶくろ』（ウクライナ民話）では、おじいさんが雪の中に落とした片方の手袋に、動物が暖を取りに入っていきます。はじめはネズミ、次にかえる、キツネなど、だんだん動物が大きくなって、最後は熊が入ります。先に入ったものと新たに現れる動物が挨拶を交わし、描かれている手袋はなぜかどんどん大きくなり、はしごがかけられ、窓や入り口も描かれて、子ども心に不思議に思いつつ、何度も読んだ本です。

『おおきなかぶ』（ロシア民話）は、思いがけず大きく育ったかぶを、家族総出、家で飼っている動物もみんなが連なって、協力して抜く、というお話です。小学１年生の教科書に載っていて、「うんとこしょ、どっこいしょ、それでもかぶはぬけません」と音読をした記憶が蘇ります。誰かの「うんとこしょ」に、つい周りのともだちも「どっこいしょ」と続けて繰り返した、楽しく飽きないお話でした。

どちらのお話も、国境は関係なく、隣人と仲良くすることや助け合うことを、様々な動物の姿を借りてわかりやすく伝えていると思います。

## 『ハイブリッド戦争　ロシアの新しい国家戦略』　著：廣瀬陽子　発行：講談社現代新書

「ハイブリッド戦争」とはいまだ明確な定義はないものの、従来の国家正規軍による武力行使だけでない、民間軍事会社など非正規軍なども加わり、サイバー空間での攻撃や情報操作を含む新たな戦争手法をあらわす言葉である。本書は国際政治、旧ソ連地域研究を専門とする著者がこの「ハイブリッド戦争」という角度から現代ロシアの外交戦略について論じている。この新たな戦争手法がどのようなものであるのか、またその背景にあるロシアの外交戦略や目的について、具体的な例を挙げつつ丁寧な考察が述べられている。

本書の中で興味をもったのは、戦争の目的も従来からの領土の拡大だけでなく、自国にとってより望ましい状況を作り出すことにあり、そのためには相手国内や同盟国の連帯を弱体化させるためのフェイクニュースの発信・流行がなされているという点であった。であるならば、この戦争に対抗し平和を構築するためにはメディアリテラシーの涵養や、国内・国家間の相互理解と信頼醸成への努力が今後さらに必要になるのではないかと考えさせられた。

本書の出版は 2021 年 2 月であり、現在のウクライナ侵攻についての記述がある訳ではない。また著者は侵攻直前までメディアにて「ウクライナ侵攻の可能性は低い」と結果として見誤った予測をしていた。ただし、その事を踏まえてもなお本書の論考は読むに値するものである。

## 『アレクシエーヴィチとの対話「小さき人々」の声を求めて』　発行：岩波書店

この本はスヴェトラーナ・アレクシエーヴィチ氏のノーベル文学賞受賞講演「負け戦」や NHK で放送された番組の取材資料などを元に作られています。ウクライナ生まれのアレクシエーヴィチ氏は戦争の英雄神話を打ち壊し、国家の圧政に抗いながら執筆を続けるノンフィクション作家です。彼女は市井の人々の声や記憶を丁寧に拾い上げてひとつの作品に仕上げていきます。

この本はソヴィエト連邦、アフガニスタン戦争、チェルノブイリ原発事故、福島第一原発事故などについて書かれていますが、それぞれの出来事に対して「小さき人々」がどのように感じていたのか、拾い上げられたその「声」によりソヴィエトという「帝国」が現在に至るまで与えて続けてきた影響を知ることができます。現在ではロシア・ウクライナ・ベラルーシなどと一つの「国家」として独立をしていますが、そこに住む人々は単に国家として切り離すことができないほど「ソヴィエト連邦」との関わりが深いのだと伺い知れます。

この本で取り上げられる「小さき人々の声」は単に市井の人々というだけでなく、それまで持っていた物を失い・奪われ大きな喪失感を持つ人々の声です。その声に耳を傾ける事はとても大切な事です。現在ロシアがウクライナに侵攻し壊滅的な被害を与えたことなどに対する世界的な視野だけでなく、あらためて福島第一原発事故への向き合い方を教えてもらえる事となりました。

# 東海教区寺族青年連盟40周年記念大会　オンライン研修会を終えて

実行委員　日野道応

去る２月28日に「東海教区寺族青年連盟40周年記念大会」がオンラインにて開催されました。

ご講師には大阪教区豊島北組如来寺の釈徹宗先生をお招きし、「共に生きる－現代社会・仏教・お寺－」をテーマにご講話いただきました。

現代社会の諸問題、あるいは新型コロナのパンデミックの状況下において我々は「お寺」としてどのようにかかわりを持てるのかをお話いただきました。まず日本が抱える問題として中間共同体（地域社会）の変化を指摘されました。家族のあり方が「同居家族」はおろか「核家族」すら成り立たず「独居」世帯が増えている現状では、以前のような地域社会を形成しにくくなっています。以前では地域社会の上に乗りかかって成り立っていた「お寺」も変化をせざるを得ないとのこと。地域社会が崩壊しつつある今だからこそ「お寺」が地域のつなぎ役・コミュニティの中心としての役割を担えるのではないかとの指摘です。

また、この状況において、心の不安や萎縮、排除や差別といった問題が一層鮮明になってきました。現代人のテーマとして時間の捉え方「クロノス（物理的な時間）」と「カイロス（内的な時間）」の違いをお話くださいました。便利な世の中でクロノスを有効に使えるようになった半面、心にゆとりを失いつつある現代社会は「カイロス」を伸ばすシステムに乏しく、結果的に不安や排除へとつながるとのことです。心を伸ばし柔らかくする（カイロスを伸ばす）方法として、地域コミュニティとの関わりであったり、宗教儀礼であったりが大きな役割を果たせるとの事で、ここでもお寺の役割が大切だと気づかされました。

また、釈先生が実践されている事例（グループホーム・図書館など）も紹介いただき、自坊での活動のヒントともなりました。今後の活動に向けて大きな力をいただける講演となりました。

**【参加者された方の感想】**

○研修の前は「共に」というのが、現在生きている色々な価値観を持った人や年齢・性別・境遇の違う人々と、いかにして「共に生きる」ということかと考えていました。しかし、お話を聞かせていただき、過去、現在、未来の長い時間の流れの中で様々な人たちと『共に生きているんだ』と考えることが必要なのかと感じました。

○研修の冒頭で維摩経のお言葉を引きながら「人間や社会の暗い部分に出会ったとしても学び関わることをやめてはいけない」とお話くださったことが強く印象に残りました。「煩悩具足」・「いかなるふるまいもすべし」とみ教えに聞くことが、どんな悲しみにも目を背けることのない強さにつながるとの思いを抱くと同時に、人間や社会はそんなものだと開き直る姿に陥ることなく関わり続けていきたいと改めて感じました。

○中間共同体の重要性のお話に共感しました。お寺はまさに共同体に乗っかっているものと思います。社会や世間と関わりしろを持ち、それを提供できるよう発信しながら、何ができるか模索していきたいと思いました。

○お寺への協力者についてのお話では「かかわりが薄くなる人も多く出てくるだろうが、まじめにやっていれば必ず賛同者は現れる」という言葉は大きなエールとなりました。ついつい「みんなに」と思ってしまいますが、まずはひとりずつでも協力者、賛同者を増やすようにしていきたいと思いました。

~声（読者のページ）~

## 『仕合わせ』

20 歳の頃、何か新しいことがしたいと思い、それまでスポーツ一筋だった私が歌を始めました。楽譜が読めるわけでもなく、音感があるわけでもなかったのですがその魅力にどんどん引き込まれて気づけば今年で 10 年目。

これまで様々な楽曲に出逢い、たくさんの地域で歌わせていただく機会がありました。そこで出逢った、中島みゆきさんの『糸』という曲。

きっかけはメンバーの友人から、歌ってほしいという一言でした。私はこの歌をこの時まで知りませんでした。ですが、歌詞の意味を理解し、練習を重ねていくうちにどんどん好きになり、大切に歌っていきたい曲となりました。

**「なぜ、めぐり逢うのかを私たちはなにも知らない。いつ、めぐり逢うのかを私たちはいつも知らない」**

どこで繋がっていたのか分からない人たちが音楽という縁をきっかけに出会い、その人たちで音楽を作るということに面白さを感じながらも、不思議な気持ちを抱いたことを覚えています。

現在はメンバーにも様々な環境の変化があり、集まれていませんが「また歌いたい」という気持ちで繋がっています。

**「逢うべき糸に出逢えることを、人は仕合わせと呼びます」**という『糸』の最後の歌詞のように仲間に出逢えた喜びを大切にしていきたいと思います。

~声（読者のページ）~

## 『プライバシー』

ある日健康診断のために地元の診療所に行きました。受付を済ませ待合室で順番を待っていると、「〇〇××さーん」と看護師さんが別の方を呼ぶ声が聞こえました。〇〇は全国的には少し珍しいけれど、私の小学校区内では沢山いる苗字です。なので、「あぁ地元の人が来てるのかなぁ」とか「××って下の名前もなんか聞いたことあった気がするなぁ、知り合いの誰かだっけ？」とかぼんやり考えていました。すると、返事をした〇〇さんの所に看護師さんが向かい「今日は母子手帳を持ってきた？」と話す声が聞こえて気ました。「へぇ、若い女性なのかな」と思ったときに「自坊の子ども会に来ていた子と同じ名前だ！！」と思い当たりました。

それからは頭の中がフル回転です。「あの子いくつだっけ？子ども会に来ていたのはそんなに昔じゃないから、まだ 20 歳を少し過ぎたぐらいだぞ。苗字が変わってないってことは結婚相手が〇〇姓になったのかな？それとも独身で子ども授かったのかな？親御さんはこのことをご存知なのか！？」と勝手な想像を広げてしまいました。

結局、待合室から診察室に向かうその人を見てみたら、子ども会に来ていた子とは別人でした。ただ、思わぬかたちでその人が大事にしていることが明かされたり、当然のようにフルネームが周りにも聞こえるように呼ばれるって、時に怖いことかもしれないと感じました。